

至誠の人 吉田松陰 (最終回)

講師 一龍斎貞花

吉田松陰亡き後、主人公の如き働きをして、今までの歴史では伊之助の働きは全くといってよいほど記録にない。

改めて同盟のなりゆきを書かせていただきます。

坂本龍馬が仲立ちをして薩長同盟への第一回の会議は、お互い面子にこだわり、ことに薩摩は大藩を鼻にかける。長州にしてみれば禁門の変で薩摩にほろぼされただけに仇敵。急進派をなだめての会談だけに強気を見せなければいけない。

薩摩藩は西郷隆盛、長州藩は桂小五

郎。桂は松下村塾の塾生ではないが、若き日藩校明倫館で松陰から教えを受けており、弟子ともいわれている。

孤立状態の長州、同盟こそ生き延びる道と、藩主の側近であった小田村の進言もあつたことだろうが、龍馬が、桂や西郷を必死で説得。推進したのが薩摩藩影の宰相といわれる家老小松帯刀。西郷、大久保利通を動かした人。

そしてもう一人、ほとんど知られていないが、福岡藩士月形洗蔵、藩内尊攘運動を推進。藩主黒田長溥が薩摩の島津家からの養子で、前藩主島津斉彬の側近だった西郷や、小松と親交があり、長州藩と連絡をとり、三条実美ら五卿が大宰府に移る際尽力。人名辞典にも掲載されている人物。

企業の合併は、第三者の仲介によることが少なくないが、ライバル同志の同盟となれば尚更です。

日数を重ねたが、京都の薩摩藩邸にて小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通。長州側は桂小五郎、品川弥二郎、三好軍太郎出席のもとに同盟成立。龍馬は土佐の上、脱藩者だから正式会談には出席出来ない。小田村も出席していない。

大政奉還・王政復古

幕府の長州攻めは失敗。この戦いのうち、反幕府派が大きな勢力をもち、慶応三年（一八六七）十月大政奉還、同年十二月王政復古、かくして新政府

樹立、戊辰戦争にも新政府軍の中心は長州、松陰の教え子たちの働きによって維新となる。明治四年、桂小五郎改め木戸孝允が断髪令。ちよんまげを切った者が妻から離縁されたり、反対の一揆が起こったり。新時代を迎えるにあたり外国と肩を並べるには、風習を改める必要があるとの考えから。明治六年三月二〇日明治天皇断髪によって国民も断髪。廢刀令など文明開化へ歴史スタイルの変化がありました。

逃げの小五郎といわれたが、危機を何度も脱出したからこそ維新の三傑の一人と言われるまでの活躍をした木戸。龍馬は、大政奉還されるや、刀は床の間に、ピストルも持参せず祝杯、刺客

のために中岡慎太郎と共に斬殺された。油断といえよう。松陰、久坂、高杉はじめ死んでいった志士たち。もし龍馬が永生きしていたならば、政治家になることなく、ビジネスマンとして世界に大きくはばたいていたのではないでしょう。長命の勝利といわれる徳川家康の如く、責任ある立場の方こそ健康管理に留意して下さい。

群馬県令・楢取素彦

慶応元年、花燃ゆ主人公文は、毛利定広の正室安子に仕え、長男元昭が生まれるや守り役を務め、その頃美和子と改名。その後実家に戻り、玄端と京都の芸妓の間に生まれた秀次郎を複雑な気持ちで引き取ります。

明治九年、政府に不満を抱く士族らの叛乱。

旗頭が松下村塾出身の前原一誠。兄梅太郎の長男で吉田家を継いだ小太郎。玉木文之進の養子。乃木希典の弟正誼はじめ五百人、しかしわずか十数日で鎮圧され、前原処刑、小太郎、正誼戦死。この乱に養子や門人が多く加わっ

た責任を取って文之進自決。梅太郎は役職を辞任。杉家は正に悲劇のどん底でした。

主君敬親の儒官を務めていた小田村伊之助は、楢取素彦と改名し群馬県令に執任。楢取は、品質の良い上州生糸の振興に心血を注ぎ輸出にも尽力。明治十三年政府が富岡製糸場の取り壊しを検討するや、

「廃滅は、工業が日々新の今日、各国に対して恥です」と、断固反対。

素彦がいなかったら今日の世界遺産登録はなかったかも。凶作対策として、そばとじゃがいもを世に広め、農業の改良、石垣いちご考案者船津伝次平を高く評価し、大久保利通に推薦し日本の農業のリーダーになっています。

群馬県の公娼廃止などまじめな人物で、男爵、貴族院議員を務めた。妻の寿が病気になる東京の息子の家で治療。心配した美和子が看病に駆けつけ、時には姉の代わりに前橋の素彦の身の廻りの世話を。寿が四十三歳で亡くなるや、素彦は自分を支えてくれた美和子に求婚。「女は生涯貞節を守れ」という兄松陰の教えと、亡き夫玄端の

ことが思われ迷っていたが、玄端から送られた手紙を持って嫁がせてくれるならと、二年後明治十六年結婚。素彦五十五歳、美和子四十一歳。素彦は惜しまれながら群馬県令を辞し元老議員となり、妻が大切にする玄端の手紙二十一通を家宝の巻物にして「涙袖帖」と名付けて子孫に伝えます。

夫婦は仲睦まじく明治三十年、夫婦共に明治天皇第十女貞宮の御養育に携わり、晩年は小田村氏由縁の山口県三田尻、防府で穏やかな日々を過ごし大正元年、素彦八十四歳で亡くなり、九年後の大正十年文こと美和子七十九歳でこの世を去り、防府市桑山の大衆寺に素彦と美和子が並んで眠っています。

これまで知られていなかった楢取素彦という人物が、文の夫であったところから、松陰の友人として大きく取上げられ、松陰は、安政の大獄で取調べを受けた時、悪くても遠島ですんだものを、老中暗殺計画を述べ立て処刑。純粹というか、直情というか、信じたまま突っ走るの陽明学を学んだ影響。朱子学は、江戸幕府官学として保護し広めた学問で、知を磨く教え。

山口県では今なお松陰を尊崇する気持ち強く、松陰が説いた「至誠」、真心を尽くせばなせぬことはない、気持ちは必ず伝わるという。安部総理も「至誠」と揮毫しています。

萩の飲食店で、「ふみ御膳」「ふみ弁当」が期間限定(27年12月31日迄)。折角の大河ドラマによる集客や、お土産など一過性で終わるところが多いが、永続させなければ勿体ない、知恵をしばってほしいものです。

「人、賢愚ありといえども、各々一、二の才能なきはなし。湊合して大成する時は必ず全備する所あらん」賢愚の差はあろうとも、誰にでもひとつやふたつの長所はあるもの、それを伸ばせば、いずれは必ず立派な人になる。長所を伸ばし人を育てる。

社員育成に、松陰先生のこの言葉を記し、至誠の人吉田松陰、これをもつて読み終わりと致します。ポポン

